

高等教育での学びを実社会で活用するための取り組み

Efforts to utilize learning experiences in higher education for real society

白井 直之

Naoyuki USUI

Abstract

This paper describes the improvement project of the Co-op store at Gifu city women's college by students majoring in architecture and interior. The purpose is to refer to the possibility of social contributions by students, by means of describing the learning experiences in higher education. Techniques for making drawings and model making students studying at college were also utilized in meetings and making the proposal panels of size A1. Then, they made a presentation to the client and users and held group discussions in order to deepen the understanding of the participants and receive opinions from different points of view. After that, we actually implemented the improvement plan. This activity received the grand prize and a category prize at the University Co-op Tokai Block in 2018.

Keywords：岐阜市立女子短期大学、建築、インテリア、改善計画

1. はじめに

1.1 背景

筆者は、岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科建築・インテリア専修の教員である。2018 年度は建築・都市デザイン研究室(以下、白井研)を担当しており、研究キーワードとしては、地方都市の将来像、公共施設とその役割、質の高い住宅、リゾートエリア周辺の地域、などを掲げている。2018 年度に白井研に配属された 2 年生は 9 名おり、それぞれが先にあげたキーワードを元にテーマを設定し、調査と提案を行う”卒業研究”の他に、美殿町商店街の夏祭りへの出店¹、柳ヶ瀬商店街の空き地活用²をはじめ、大小さまざまな活動をした。それらの活動のほとんどは、学生の単位取得とは直接的な関係がない研究室の自主的な活動である。

1.2 目的

本稿では、それらの活動の中から特に、学生達が岐阜市立女子短期大学生生活協同組合(以下、岐女短生協)の店舗の改善を行なった活動(以下、生協改善計画)を取り上げる。そして、短期大学 2 年生が大学で学んだ事柄を実社会へ活用しようとした経験を記述する事で、短期大学の学生による社会貢献の可能性に言及する事を目的とする。

1.3 岐女短生協

岐女短生協は学生や教職員約 600 名³を組合員とした大学生協であり、購買と食堂を岐女短の敷地内に構えている。

購買で取り扱う品目は他の大学生協と同様に多岐に渡る。文房具や生活用品の他にも、パソコンやアプリケーションソフトや、あるいは自動車学校や語学学校の仲介も行っており、教育・研究活動をはじめ学生の大学生活において必要となるあらゆる物を取り扱っている。

しかし、バックヤードなどを除いた、商品棚と通路部分の面積は約 60 m²と、他の大学生協と比べ小規模な店舗である(図 1)。



図 1 岐女短生協の購買(生協改善計画の前)

2. 生協改善計画の経緯

2.1 特徴的な校舎

岐女短の校舎は、岐阜県内を中心にさまざまな公共建築を手がける設計事務所による設計である。その意匠はコンクリート打ち放し仕上げを基調としたマッシブな造形表現とガラス開口による解放性とが兼ね備えられた特徴的な建築と言える(図2、図3)。

筆者は2016年4月に岐女短に着任し、校舎の建築的な魅力を感じると同時に、設計者の設計意図が利用者に伝わっていない部分が多々あることに気が付いた。その一つが、岐女短生協の購買であった。

2.2 購買の空間への不満

2018年1月に、生協職員A(以下、職員A)が店舗担当者として岐女短生協に着任した。職員Aは店舗の印象を、全体的に薄暗く女子大生が好みそうな雰囲気が作れていないと感じた。岐女短生協で長年働いている他の職員も同じように感じるものの諦めていたようだ⁴。

2018年5月初旬に筆者は職員Aから、薄暗い雰囲気があまりよくないので、コンクリート打ち放しの壁や柱に飾り付けなどをして明るくできないかと相談をされた。それに対して筆者は、飾り付けはみっともない物が増えるだけなので効果はわからないという事と、そもそも窓際に冷蔵庫を並べてブラインドも閉めているから薄暗いのでは、と答えた。そして、そのやりとりを臼井研の学生達に伝えたところ、彼らも購買の雰囲気や昼休みの混雑に不満を抱いている事がわかった。

2.3 学生への投げかけ

岐女短生活デザイン学科建築・インテリア専修で学ぶ学生達は、1年次から設計について学んでおり、演習の授業では図面と模型にて提案する方法を学んでいる。そこで、筆者は学生達に、不満を述べるだけではなく、どうしたら岐女短生協が良くなるのかを提案をしてみたらどうか、と投げかけた。

2.4 担当者

臼井研には9名の学生がいる。全員でまとまって動くのはフットワークも悪くなると考えられたため、改善計画の担当者を決めておこうと考えた。担当者と言っても主な役割は先方との窓口になる事で、実際の作業は担当以外の者で協力して行えばよいと考えていた。

その頃、9名のうち7名がネットワーク大学岐阜コンソーシアム⁵主催の「学生による課題解決提案事業⁶」に申請予定であった。残る2名は、取り組んでいる研究が申請条



図2 岐女短の外観



図3 岐女短の内観

表1 改善計画の流れ

日程	主な内容
5月初旬	プロジェクト発足
5月14日	テラスの掃除
5月17日	タープを張る練習
6月	現況の図面および模型の作成 ・改善案の作成 ・生協職員Aは上司への説明
7月6日	改善案1の提示と議論 ・案1への要望が出される
7月23日	改善案2の提示と議論 ・改善案2の作成に際して 浮かび上がった疑問の解消
8月6日	改善案3の提示と議論 ・棚などの配置の意図の共有
8月23日	プレゼンテーションの開催 ・学生からの説明と質疑応答 ・グループディスカッション ・意見と課題の共有
9月10日	改善案への変更作業 ・棚の入れ替え ・電気配線の整理 ・不要な広告の破棄など
9月19日	調整
9月20日	後期の営業開始

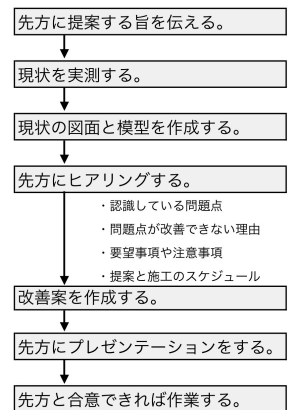


図4 学生に伝えた流れ

件の対象外であったため申請できない事がわかっていた。そこで、その2名を窓口としての担当者として指名した。

2.5 計画の流れ

本計画の全体の流れを表1に示す。5月初旬に筆者が職員Aから相談を受けた時をプロジェクトの発足とした。

はじめに筆者は担当の2名に、建築・インテリア分野でこういったプロジェクトを動かすために必要となる一般的な流れ(図4)を伝えた。

3. 打ち合わせの方法

3.1 打ち合わせと作業

打ち合わせは職員Aと臼井研の担当者2名を中心として行われた。はじめに筆者は職員Aに学生が打ち合わせに行く事のみを伝えたが、その後は担当者2名が職員Aと直接連絡を取り合うという流れができた。さらに、筆者は打ち合わせにも同席しなかったため、彼らがいつどのような内容の打ち合わせを行ったのかは、基本的には打ち合わせ後の報告で知った。

担当以外の7名は、打ち合わせで懸案事項の検討を行うことと、それらを形にするための図面や模型を制作した。臼井研の学生達は、卒業研究や演習科目を含む授業科目の他に他のプロジェクトにも取り組んでおり、またアルバイトや自動車学校通学などを行う者もいたことから、9名全

員で集まるというよりは、それぞれがお互いの都合と役割を確認し合い、それぞれの空き時間を効率的に利用していたようである。

3.2 模型を用いての打ち合わせ

打ち合わせにはスタイロフォームとスチレンボードで作られた縮尺 1/25 の模型を用いた。商品を並べる棚は基本的には既に使われているものを利用することになっていた。そこでまず、すべての棚の幅、高さ、奥行きを実測した。それを元にスタイロフォームでそのヴォリューム模型を作り、そこに現状の商品が並んでいる棚の立面写真を貼り付けた。その模型を動かしながら、どこにどういった商品を並べる棚があると良いのかを検討した(図 5、6)。

平面図では高さの情報について共有しづらく、多くの人が同じ認識を持ってない恐れがある。模型製作に時間はかかるが、短時間で多角的な視点で議論を進めるためには有効な方法であった。

建築設計者として実務を行っている筆者は、施主との打ち合わせや市民向けワークショップなどでこうした手法を用いている。設計演習系の授業の中で模型製作は教えてはいるが、それが実社会の中でどのように使われるのかまで伝わっているかはわからない。今回はそれを体験できたのではないかと考える。

3.3 情報共有の方法

研究室内の情報共有は、9名と筆者からなる LINE のグループ⁷で行った。2名が行った職員 A との打ち合わせの内容の報告や、誰かに依頼したい作業などをそのグループで情報共有した。このグループはサブジェクトベースではなく、研究室メンバーというユーザーベースで構築した。そのため、複数のプロジェクトの情報に同一のスレッド⁸で行き交う事もあった。しばしばそれを煩わしいと感じる事もあったが、プロジェクト毎のグループを作ったとしてもメンバーが同じ場合、内容によってはどのスレッドに書き込むべきか分かりにくくなる事を懸念した。その前提には、筆者が複数のプロジェクトを同時に進行するには皆でワークシェアしながら取り組むのが良いと考えている事がある。

4. テラスの存在

4.1 テラスの掃除

購買の南面は床から天井に達する大きなガラス開口がある。そして、その外部は高さ約 3.3m のコンクリート打ち放しの壁で囲まれた、間口約 8.7m、奥行き約 4.2m の外部空間(以下、テラス)である。このテラスは壁に囲まれた

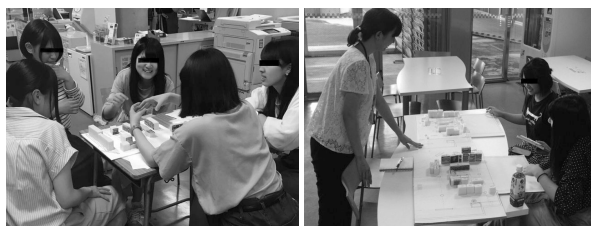


図 5 学生同士の打合せ

図 6 生協職員との打合せ



図 7 壁に囲まれたテラス

図 8 浮かび上がった汚れ



図 9 タープを張る練習

図 10 タープの完成

落ち着いた空間となっており、筆者は着任当初から、ここを美術館の中庭のような展示空間として使うこともできるのではないかと考えていた(図 7)。

このテラスがいつから使われなくなったのかはわからないが、床には落ち葉がたまり、雨と埃によって黒ずんでいた。落ち葉は学内の委員会による美化活動で回収された。そして、黒ずんだ汚れについては職員 A をはじめとする生協職員と学生 2 名および筆者が、家庭用の高圧洗浄機を使って清掃した(図 8)。

4.2 タープを張る練習

その後、このテラスを利用して白井研の学生 9 名と 1 年生 4 名で 5.4m×3.6m のタープを張る練習を行った(図 9、10)。これは、商店街の空き地活用をする際に、空き地に日陰を作るために学生達がタープを張れるようになったら可能性が広がるのではないかと考え、筆者の発案で行った。この練習を通して学生達には、タープを張る手順だけでなく、ロープワークや機械式アンカーの仕組みのほか、建築物の膜屋根の仕組みについても伝えた。

筆者はこの活動に参加した一部の学生達に感想を聞いて

た。その中には、自分達の身近な空間は自分達の手で改善することができるということ、身近にそういったポテンシャルを秘めた空間が眠っていることに気が付いた、といったものがあつた。

5. 岐女短生協からの要望など

岐女短生協と学生との打ち合わせを重ねる中で、さまざまな議論がなされた。その内容を整理すると、現状の問題点や要望と、配置変更の際に考慮すべき事項に分けられる(表 2)。前者については岐女短生協も学生もすでに認識しており、話を聞いて現地を見ると確かにそうだと気が付く内容である。それに対して後者は、普段客として利用しているだけでは気が付かないようなことである。

6. 提案

6.1 コンセプト

学生達は岐女短生協と議論する中で導かれた改善案を、A1 パネル 3 枚の提案書と模型にまとめた(図 11~図 13)。改善案は打ち合わせの中で明らかになった問題点や要望を網羅している必要がある。しかし、それだけでは対処療法的なものになってしまい、魅力には繋がりにくいのではと考えた彼らは、あるコンセプトを作った。それは、サードプレイス⁹を作ろうという考えであった。自宅や職場・学校ではないもう一つの寛ぐことができる空間があることで大学生活が豊かになると考えたようだ。そのために、空間に明るさと広がりをもたらすことが必要で、具体的には南側の窓面を解放することと、商品棚のレイアウトを変えることが提案された。

6.2 提案書

提案のタイトルは『サードプレイス テラスタア』とされた。テラスタアとは、テラスとストアを合わせた造語である。提案はコンセプトに基づき、空間の雰囲気をよくするポイント(採光、棚の背の高さ)、売り上げを上げるポイント(人の動線、棚の並べ方)といった切り口から、模型と図面を用いて視覚的にわかりやすいように構成されている。

7. 提案の発表

7.1 プレゼンテーション

学生達の提案は、2018年8月23日にプレゼンテーション形式で発表された。発表者である臼井研以外の出席者は、パート職員を含む岐女短生協の職員が6名、組合員でもある教職員が12名であった。さらに、岐阜新聞および中日新聞の記者それぞれ1名が取材に訪れた。

表 2 要望など

■現状の問題点や要望	
薄暗い雰囲気	明るい雰囲気にならないか
レジに並ぶ長い列	レジの正面に長い列ができており、店内への入り口を塞いでしまう。
店内の見通し	棚の背が高く、入り口側から店内が見通せない。
電気配線の整理	天井の配線ダクトを使っても良いが見栄えが良くない。
文房具棚	商品間に隙間があり品薄な感じがする。棚が綺麗に見えるような陳列のレイアウトを提案して欲しい。
本棚	参考書の売れ行きが良くないので、棚3台のうち1台を話題の本を陳列する棚にしたい。
お菓子の棚	あまり売れ行きが良くない棚を減らしてスペースを有効に使いたい。
■配置変更の際に考慮すべき事項	
支払い忘れ対策	店舗にどこからでも入れてしまうのはセキュリティ上あまりよくないので店員がいるレジの近くを入り口としたい。
日焼け	商品が直射日光にあたり日焼けしないようにすべき。
教科書の販売場所	各学期のはじめに大量の教科書を並べられる机や棚が必要。常設の棚である必要はないが、机を並べられるスペースは確保したい。
コピー機の位置	レジから近く見える位置で、バックヤードに入れない位置にあるのが良い。
雑誌棚の位置	立ち読み対策のために店員の目に届く位置にして欲しい。
文房具棚と本棚の数	数は変えず、仕入れる商品と商品の配置レイアウトを変更したい。



図 11 提案書 1 枚目

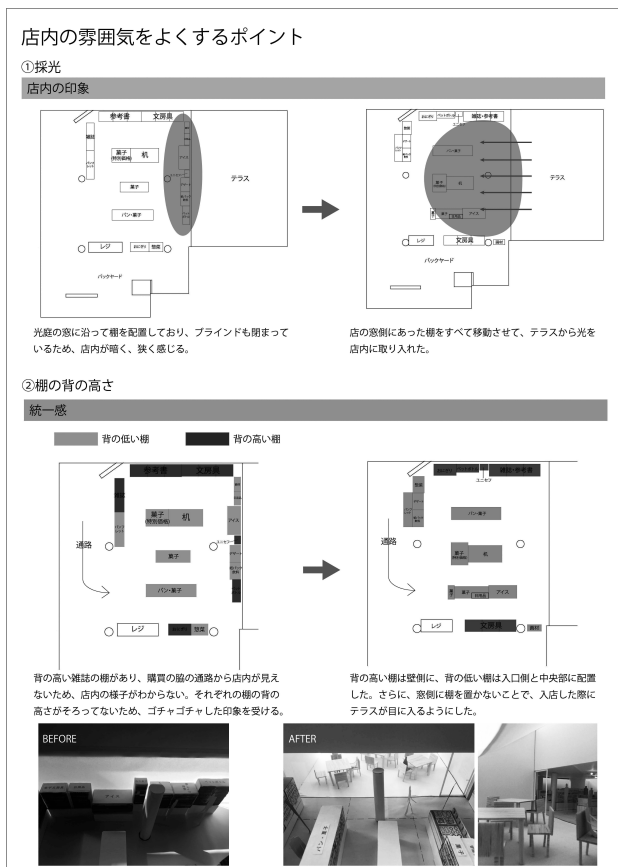


図 12 提案書 2 枚目



図 14 プレゼンテーション



図 15 グループディスカッション

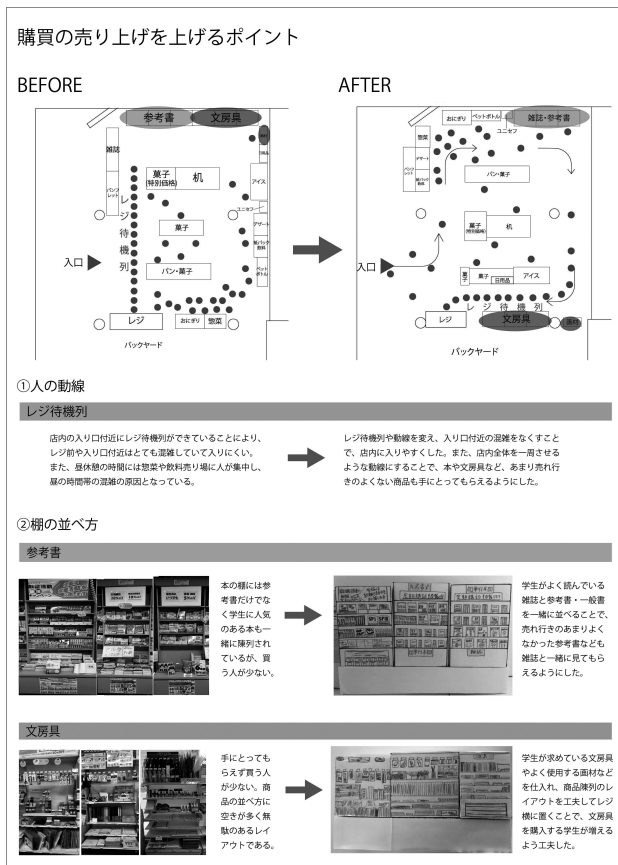


図 13 提案書 3 枚目

7.2 当日の流れ

発表では、はじめに学生から提案書と模型およびパワーポイントを用いて説明と質疑応答を行なった(図 14)。その後、3つのグループに分かれて、グループディスカッションを行った(図 15)。それぞれのグループに白井研の学生が入り、質疑に答えながらファシリテーションを行った。そして最後に、グループディスカッションで出された意見や課題などを発表し、参加者全員で共有した。発表開始から終了までは約 90 分であった。

7.3 グループディスカッション

グループディスカッションを取り入れた目的は大きく二つあった。一つは、参加者が提案内容を深く理解するためである。多くの時間をかけてパネルや模型として表現された案であっても、その設計意図までを理解するのは難しいからである。もう一つは、気軽に意見する場を設ける事で、プロジェクトに関係と関心を持ってくれる人を増やすためである。

学生達にとっては、自分が行った設計について、違う年齢、違う立場の他人から意見を吸い上げ、さらにそれをまとめるという、貴重な経験であったと考えられる。

8. 作業

発表した際にあげられた意見を生協側とすり合わせた後、商品棚などのレイアウト変更をした(図 16)。岐女短生協は学生の夏休み期間は購買を閉店する。そこで、この期間内の 9 月 10 日に生協職員と臼井研の学生の他、有志の学生で作業をした。

商品棚を移動させるために並んでいた商品を箱の中や机の上に一旦並べ、棚の移動後に再配置した。飲食物を陳列する冷蔵庫は、ブレーカーの容量を超えないように配線ルートを決める必要があったが、系統とコンセントの関係がわからなかったため、施設の電気設備図面を確認した。

テラスのタープについては、練習で張ったタープが台風により破損していたため、ロープの本数を増やすなどの補強を行い、再度設置した。

9. 社会の反応

9.1 新聞記事への掲載

2018 年 8 月 23 日の発表の様子は、同年同月 24 日付け中日新聞(図 17)および同年同月 28 日付け岐阜新聞(図 18)に掲載された。

9.2 全国大学生協同組合連合会東海ブロック¹⁰(以下、大学生協東海ブロック)での受賞

岐女短生協は、この生協改善計画を大学生協東海ブロックが主催する 2018 年度の「お店・食堂活動大賞¹¹」に応募した。開催概要によると、この賞の目的は『店舗をより生協らしい提案と商品サービスにあふれた店にしていこう』を競い合っ て学び抜けること、である。

そして、「大賞」と「部門 D：組合員の意見要望が実現した事例とそのためのとりくみ」の「部門賞」を受賞した(図 19)。

10. まとめ

この生協改善計画は、建築・インテリアを学ぶ学生達が、大学での学びを活用して実際の店舗のレイアウトなどの改善を試みた取り組みである。

自分達で実測をして、店舗担当者と打ち合わせをする。そして、まとめた案を利用者の前でプレゼンテーションし、実際に計画を実行に移す。その一連の流れの中で学生達は、教室の中で学んでいる事が社会ではどのように活用されるのかの一端を知る事ができたのではないかと考える。この活動のなかの職員 A と学生の役割は、設計実務に置き換えて考えるなら、クライアントと設計者に相当し、そのロールプレイングを行っていたとも言える。

設計演習系の授業の中でも、それが単なる絵空事とはな



図 16 作業の様子



図 17 中日新聞 (2018 年 8 月 24 日)



図 18 岐阜新聞 (2018 年 8 月 28 日)



図 19 トロフィー(大賞)と賞状(上：大賞、下：部門賞)

らないように指導はしているが、やはり実際の実物を動かす事が前提となる今回の場合は、学生達はより責任感を持って取り組んでいたように観察される。

このように教育という点では効果の高い活動であったと考えるが、今後のために課題も記す。一つ目は、この取り組みによって、岐女短生協の明るさや広がりなどの雰囲気は変わったが¹²、サードプレイスとしての利用までには至っていない点である。この原因には、テラスや窓際に利用者が居着くような椅子や机が設えられていない事があげられる。テラスは外部空間であるため夏は蒸し暑く、冬は寒いため、そういった季節には滞在しづらい空間である事も分かった。

また、今回の活動では、学生にとって次のようなアドバンテージがあった。

- ・ 大学の敷地内に店舗があるため、調査や作業をするための移動に時間がかからなかった。
- ・ 学生自身も組合員であり、毎日利用している店舗であるため、解決すべき問題の共有がしやすかった。
- ・ 大学生協という性質上、学生に対して親身になってくれる生協職員が多かった。
- ・ 学生の夏休み期間に閉店する店舗であり、作業時間が確保できた。

これらのアドバンテージがなかった場合、すなわち一般的な商店や団体との協働となった場合に、どのように活動が行えるのか。それらが今後の課題と言える。

謝辞

生協改善計画を遂行するにあたり、岐女短生協の職員の皆様にご協力を頂きました。感謝致します。

また、2018年度の臼井研がさまざまな活動¹³を展開できたのは、学生達¹⁴自身の主体性とチームワークのおかげである事をここに記します。

参考文献・注釈

- ¹ 2018年8月11日第34回美殿町ガス灯夏祭り。岐阜大学工学部出村研究室との合同チームで出店した。
- ² 柳ヶ瀬商店街にある空き地を有効活用しようとする取り組み。岐阜大学工学部出村研究室が主導する。
- ³ 2018年2月時点で611名。
- ⁴ 全国大学生協同組合連合会発行「2018年度通常総会事例集」p.56の記述による。
- ⁵ 岐阜県内の大学等23校と岐阜県で構成する共同体。1998年の設立以来、地域における知的活動の中心拠点として、高等教育に対する多様なニーズに対応し地域社会の発展に寄与することを目的に、大学間の単位互換制度を中心に事業を行っている。

- ⁶ 学生が地域の課題について研究し、解決に向けた提案を行う事業。
- ⁷ LINEの機能。複数のユーザーで情報を共有できる。
- ⁸ 投稿を並べた掲示板。
- ⁹ 自宅や職場ではない、一個人としてくつろぐことができる第三の居場所。米国の社会学者レイ・オルデンバーグが、1989年に自著『The Great Good Place』で提唱した。
- ¹⁰ 大学生協東海ブロックは、名古屋大学消費生活協同組合や岐阜大学消費生活協同組合をはじめ、19個の東海地方の大学生協組合からなる。
- ¹¹ この賞へは、大学生協東海ブロックに加盟する会員が応募できる。エントリー部門は、A)健康安全提案がしっかり伝わる店、B)学びと生協提案がしっかり伝わる店、C)社会とつながり、社会とかわる提案がしっかり伝わる店、D)組合員の意見要望が実現した事例とそのためにとりくみ、E)組合員の立場に立った店舗運営がなされている店、という5つがある。2018年度の応募は、2017年11月から2018年10月までに実施されたものである。応募期間は2018年10月1日から同年同月29日であり、この期間にアピールシートを作成して提出する。そして、同年11月9日までに東海事業連合や東海ブロック事務局を中心に部門賞と大賞が決定される。その後、同年12月1日開催の東海ブロックフェスティバルにて発表されるという流れである。
- ¹² 全国大学生協同組合連合会発行「2018年度通常総会事例集」p.57の記述による。
- ¹³ 既述の活動にはその準備が必要である。その他に、美殿町商店街や柳ヶ瀬商店街にて部屋を借りてゼミを行った回数は12回。その前後の時間にはまち歩きを行うようにしており、一年間の商店街の雰囲気を体感した。また、設計事務所や工務店への視察が2回、市内で催されたまちづくり系の講演会への出席が2回など。
- ¹⁴ 片桐朋香、川瀬美希佳、木下晴奈、高木日菜、塚原ちさと、直井悠菜、長屋祈里、山岸ゆき、山口紗里佳。

(提出日 平成31年1月8日)